

F-18 家庭経営の変動に関する生活史的研究(Ⅱ) - 福島県郡山市湖南町調査を例として - 家族の変容とくに結婚慣習の推移について
福島大教育。岡村益 郡山女大家政 大方笑子

目的 家庭経営の変動の契機の一として経営主体たる主婦の世代交替があげられる。結婚は直系家族周期において世代交替の前提として重要な意味をもつ。伝統的な農家の場合、結婚は嫁にとって順応の第1歩にすぎなかつた。近代的な結婚においては家庭経営変化の契機としての意味をもつことになるが果してどうであろうか。結婚の推移を通して家政様式変動への契機としての意義に接近することを目的とする。

方法 猪苗代湖南地域の農家世帯主の母・妻・後嗣の妻合計65人に面接聴取りを行い、結果を結婚年次別(Ⅰ明治~大正6、Ⅱ大正7~昭和5、Ⅲ同6~20、Ⅳ21~35、Ⅴ35~)に分類してその推移状況をみ、一方家政担当に対する意識と照応した。

結果 結婚は殆ど農家同士の嫁入婚である。結婚年齢については、時期の降るにつれて学校教育年数と関連して僅ながら上昇した。通婚圏は特例を除き湖南地域内に限られて居り、この婚域の狭さは昭和30年頃まで動かなかつたようである。但し、湖の東岸と南岸ではやや異なる慣習をもち、東岸において特に部落内婚率が高くそれが村内婚へと推移する傾向がみられた。配偶者選定範囲をみると親類同士の縁組が支配的であり、いわゆる第一次領域内である。見合いも戦前はむしろ例外であつた。仲人も「親類の人」というのが圧倒的多数で村のオモダチなどは稀であり、この村の社会構造と関連してか依然として変化に乏しい。変化の方向としては上記のほか、アシイレからアシイレなしへ、嫁入り道具簡素から形式整備へという事になるが、全体的に昭和35年以降変化が顕著になる。家政様式への影響が表われるのは今後の事と思われる。